I-18

コレクションを持たない芸術展示施設に関する研究
施設種類、登場背景に着目して
A Study on Non-Collecting Art Exhibition Facilities
Focusing on the type of facilities and the appearance background

○中川紗里奈[1]，　堀切梨奈子[2]，　佐藤慎也[2]
*Sarina Nakagawa[1], Rinako Horikiri[2], Shinya Satoh [2]

Art exhibition facilities where have no storages are getting more diverse. This study summarises those places. The purpose of this study is to figure out their common feature. In conclusion, non-collecting art exhibition facilities have in common that they mainly exhibit contemporary art and play an important role where can display emerging artists and new genres. Additionally, founders vary in position from a citizen or an artist to administration.

１．研究背景

芸術を展示する場として、「収集・保存・コレクション」機能を持たない芸術展示施設は数多く存在し、多様性を増している。コレクション機能を持つ美術館に関しては、多くの文献で取り上げられ、議論されている一方で、「コレクションを持たない芸術展示施設」に着目して述べられた文献はほとんどない。美術館という枠に収まらない、多岐に亘る芸術展示施設を、「コレクションを持たない」ことを共通項として捉えた場合、どのようなことがいえるだろうか。

コレクション機能がないことで、伝えることに特化した施設は、多角的視点を持っていると考えられ、そのような視点は、対話を生むきっかけに繋がるだろう。以上を考慮すると、コレクションを持たない芸術展示施設を研究することは、現代において「鑑賞の場」という役割が強い美術館に対して、「対話の場」という新たな意義を持つ可能性があると考えられる。

２．研究対象と目的

本研究では、コレクションを持たない芸術展示施設を研究対象とする。コレクションを持たない展示施設には、どのような種類や登場背景があるかを把握するとともに、コレクションを持たないことを一括りとした時に、どのような共通点や特徴があるのかを明らかにすることを目的とする。

３．研究方法・章構成

本研究では、文献を用いた歴史的研究を行う。そして、コレクションを持たない芸術展示施設の特徴を把握するため、設立主体に着目してまとめる（表１）。

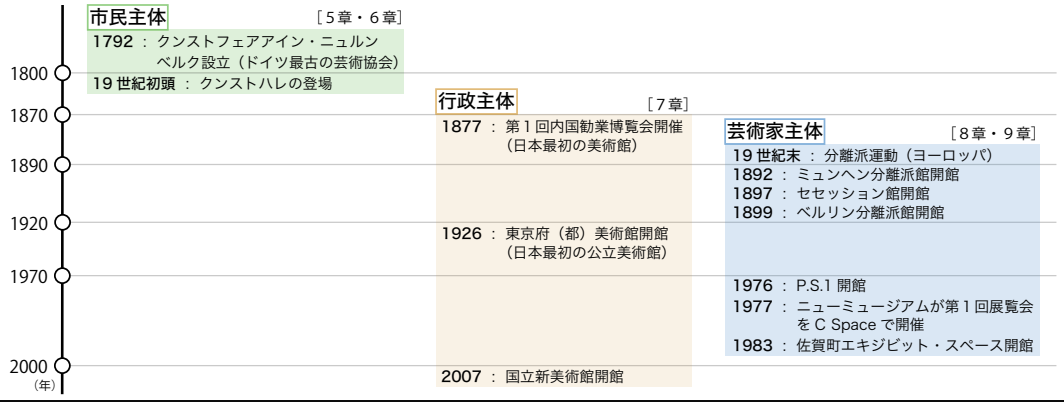
４．既往研究と本研究の位置づけ

既往研究として、現代の日本におけるオルタナティヴ・スペースの活動や意義、課題を明らかにすることを目的とした研究がある。また、アメリカにおけるオルタナティヴ・スペースの事例を通して建築空間の特質や運営の実態を調査した研究もあるが、「コレクションを持たない芸術展示施設」という視点を持った研究はなかった。

５．市民主体 ― クンストフェアアイン

ドイツを中心に、クンストフェアアイン（Kunstverein）と呼ばれる、芸術展示施設を持つ芸術愛好家協会がある。そのはじまりは、1792 年に市民の芸術愛好家と芸術家によって設立されたクンストフェアアイン・ニュルンベルクで、これがドイツ最古

表１　コレクションを持たない芸術展示施設に関する年表



１：日大理工・院（前）・建築、　２：日大理工・教員・建築

の芸術協会である。歴史的背景として、産業革命によって資産力のある市民階級、ブルジョワジーが登場したことも、このような市民の愛好家協会が登場してきたことに繋がると考えられる。

草創期のクンストフェアアインは、社会と美術を結びつけるメセナ的役割を持ち、それまで貴族のものであった美術を市民へと広げた。そして、クンストフェアアインは、芸術愛好家の集いから、出版、美術品の展示へと活動を広げ、専用の展示施設を持つようになった。展示作品は、同時代の美術を中心に取り上げる傾向が見られる。

６．市民主体 ― クンストハレ

クンストハレ（Kunsthalle）は、ドイツ語で芸術ホールを意味する、ヨーロッパを中心に広く存在する展示施設で、クンストフェアアインが母体となっている場合がほとんどである。そのため、起源はクンストフェアアインと密接に関係している。日本では一般的に、コレクションを持たない展示施設として認知されているが、一部でコレクションを有するクンストハレも存在する。

クンストハレの機能と役割の調査を行った長屋光枝によると、クンストハレは「市民によって設立され、市民がその運営に関与している」[1)]ものと定義される。そのため、行政主導で開設されたクンストハレは、厳密にはクンストハレに位置づけられていない。

７．行政主体 ― コレクションを持たない公立美術館

日本で最初の美術館は、第１回内国勧業博覧会の展示館として登場し、コレクションのない陳列としての場所だった。また、日本初の公立美術館である東京府美術館（現東京都美術館）は、1926 年の開館当初、コレクションを持っていなかった。そして、国立新美術館もコレクションを持たない美術館である。

東京府美術館の設立目的は「芸術家の新作発表の場」、国立新美術館は「企画展と公募展の専門館」というものだった。

以上より、日本におけるコレクションを持たない美術館の共通点として、「貸しギャラリー」という要素が挙げられる。また、古く日本では、美術館に対して「コレクションを持たない場所」という認識が強かったことも推測できる。

８．芸術家主体 ― 分離派運動と専用展示施設

芸術家主体の専用展示施設として、代表的な存在に 1897 年開館のセセッション館がある。設立の背景には、分離派の芸術家たちが、自由な作品発表の場を求めたことと、展示空間を含めた総合芸術という考えが影響している。19 世紀末のヨーロッパでは分離派運動が盛んに行われ、ミュンヘン分離派やベルリン分離派も専用展示施設を所有していた。

また、それ以前から芸術家主体の専用展示施設は存在し、その例として、芸術家会館（1868）が挙げられる。それは、ウィーンでアカデミーと並ぶ権威を持ったウィーン造型芸術家組合が持つ、市内で唯一の本格的専用展示施設だった。

９．芸術家主体 ― オルタナティヴ・スペース

オルタナティヴ・スペースは、1970 年代頃から、アメリカを中心に芸術家の実験的な創造活動の場として登場した。背景には、若手芸術家たちの既存展示施設に対する制度批判があった。既存の建物を修復、再生し、本来芸術のためのスペースではなかった場所を芸術の活動スペースとしており、倉庫などの低価格で広いスペースが好まれた。草創期の代表例にはニューヨークの、P.S.1 が挙げられ、日本における最初のオルタナティヴ・スペース（佐賀町エギビット・スペース）は P.S.1 を参考に設立された。

また、アメリカにおけるオルタナティヴ・スペースに関して興味深い事例として、ニューヨークにある美術館、ニュー・ミュージアムが、第１回展覧会を仮事務所近くの C Space というオルタナティヴ・スペースで行った事例がある。

10. 結論

コレクションを持たない展示施設の設立者に注目すると、芸術家や行政、市民といった分類ができ、芸術をつくり出す立場の人から、愛好家までさまざまである。また、全体の共通点として、同時代の芸術、新しい芸術の発表の場としての役割を持っていることが挙げられる。

11. 参考文献

[1] 長屋光枝：博物館研究「ドイツにおける美術館、クンストハレ、クンストフェアアインについて」，日本博物館協会，52 号，pp. 24-27，2017. 9

[2] 横山勝彦：アートの裏側を知るキーワード，美術出版社，2018. 5

[3] 斎藤泰嘉：東京府美術館の時代，印象社，pp. 6-8，2005. 9

[4] 西村勇晴：ウィーン分離派 1898-1918（展覧会図録），宮城県美術館，2001.